

# 「大震災からの復興と三陸鉄道」

三陸鉄道（略称：三鉄）は、1984年4月に全国初の第三セクター鉄道として開業した。この開業により、宮城県から青森県までの三陸沿岸の鉄道がようやく一本に結ばれたのである。東北新幹線大宮・盛岡駅間が開業した2年後、そして東北本線の全通（1891年）からは93年が過ぎていた。

三鉄の開業は、三陸沿岸に住む人々の生活向上に大きな役割を果たしてきた。かつて「陸の孤島」と呼ばれた地域に住む人々の通学、買い物、通院が格段に便利になった。また県内外から訪れる観光客により、地域経済の活性化に大きな役割を果たしてきたのである。



5年前の東日本大震災は、三鉄にも甚大な被害をもたらした。私は震災の被害を目の当たりにし、鉄道の部分運行再開を優先することを決



新レトロ調車両の前で全線運行再開のテープカット（右から達増知事、日赤広報特使の藤原紀香さん、オタイビ駐日クウェート大使、国交省坂井政務官）

定した。沿線市町村や自衛隊などの協力をいただき、運行可能と見込んだ区間の復旧を急いだ。3月中に北リアス線の一部、久慈・陸中野田駅間と宮古・小本駅間を復旧した。

この時点で運行再開できたのは、36・2 km。

全線107・6 kmの3分の1にすぎなかった。3月中に被害調査を行い、全線復旧経費を試算してみると元通りに直すだけで約80億円、ある程度の津波対策を行うと約110億円かかることが判明した。とても赤字の第三セクターに負担できる金額ではない。県などとともに国に働きかけた結果、2011年11月に108億円の予算措置が決まり、復旧工事に着手することができた。

復旧は被害の大きさや工事の難度により段階的に行うこととし、3年間で全線運行再開を目指すこととした。1次復旧は北リアス線田野畑・陸中野田駅間の24・3 km、2次復旧は南リアス線盛・吉浜駅間の21・6 km、3次復旧は残る南リアス線吉浜・釜石駅間の15 kmと北リアス線の小本・田野畑駅間10・5 kmである。

復旧工事は独立行政法人鉄道建設・運輸施設



三陸鉄道株式会社  
代表取締役社長  
望月 正彦



北リアス線の新お座敷列車の観光客とアテンダント

整備支援機構の協力を得て順調に進み、計画どおり3年での全線運行再開を果たすことができた。また、復旧工事も予算108億円に対し、なんと91億円と2割近く安く抑えて終えることができた。うれしいプレゼントもあった。産油国クウェートからの支援をもとに、県が新車購入経費を予算化してくれた。このため、三鉄では新車を8両導入することができたのである。

全国の三鉄ファンやさまざまな企業からの支援も寄せられた。世界的なチョコレート会社、大手のショッピングセンター・ビール会社・コンビニチェーン・クレジット会社などである。

◇ ◇ ◇

多くの支援、応援、協力をいただいて三鉄は全線で運行を再開した。しかし課題は山積している。震災から5年になるのに、まだ周辺に家が建っていない駅がたくさんある。防波堤が完成し、土地のかさ上げがなされないと街並みは戻らない。JR山田線の宮古・釜石駅間は、JRが復旧工事を行った後に三鉄に移管されることになったが、工事完成にはあと数年かかる見込みである。

被災地の人口減少（少子高齢化）も深刻だ。昨年10月に実施された国勢調査の速報値をみると、被災した沿岸部の人口減少が著しい。また、高台移転や復興道路の開通により車社会が一層進展するだろう。

震災からの復興は、単に家や街並みが元に戻ることはない。三陸沿岸に住む人々が、明日に希望を持って生活していけるようになること、当たり前前の日常生活ができるようになる、そのことが大切なのだと思つづくと思う。

◇ ◇ ◇

こうした中で、私は三鉄の復旧には2つの大きな意義があると考えている。1つは地域の皆さんの「生活の足」を確保すること。高校生の

通学や高齢者の買い物など、いわゆる交通弱者の交通手段を確保することである。なにより鉄道は安全・安心な交通手段であり、環境にも優しい。

2つめは地域の産業振興や活性化に貢献すること。定住人口の増加が見込めない中で、観光や教育旅行などで県内外から、そして世界から三陸沿岸地域に来ていただくことである。三鉄に乗られる観光客の運賃単価は、およそ800円である。しかし、観光客は宿泊し、食事をし、お土産を買ってくれる。そうすると地域にはひとり当たりおよそ1万5千円が落ちることになる。つまり観光客が10万人来れば三鉄の運賃収入は8千万円であるが、地域には15億円が入ることになる。三陸沿岸のみならず岩手県の交流人口拡大のため、観光客誘致はもとより震災学習列車の拡大充実などの取り組みを進めたいと考えている。

三鉄のコーポレートスローガンは「笑顔をつなぐ、ずっと・・・」である。三鉄はこれからも地域の人々や県内外、いや世界中からお客様をお迎えし、地域の復興とともに歩みながら人々の笑顔をつないでいきたい。